

平成21年度 第4回サンゴ礁 保全行動計画策定会議 議事要旨

【日時】平成22年 3月29日（月）13：30～15：30

【場所】経済産業省別館 10階 1020号会議室

【議事次第】

1. 開会
2. サンゴ礁生態系保全行動計画（案）について
 - (1) 資料説明
 - (2) 意見交換
3. 挨拶
4. 閉会

【配布資料】

- 資料1 サンゴ礁生態系保全行動計画
～豊かな地域社会を実現する健全な自然環境の継承を目指して～（案）
- 資料2 サンゴ礁生態系保全行動計画（案）の概要
- 資料3 「サンゴ礁生態系保全行動計画（案）」に対する意見の募集（パブリックコメント）の実施結果について

【出席者】

○委員（◎は座長）

- | | |
|--------|---|
| 岩瀬 文人 | 財団法人 黒潮生物研究財団 専務理事 |
| 鹿熊 信一郎 | 沖縄県 八重山農林水産振興センター 主幹 |
| 土屋 誠 | 琉球大学 理学部 教授（御欠席） |
| 寺崎 竜雄 | 財団法人 日本交通公社 観光調査部 部長 |
| 中野 義勝 | 琉球大学 熱帯生物圏研究センター 瀬底研究施設 技術専門職員 |
| ◎灘岡 和夫 | 東京工業大学大学院 情報工学研究科 教授 |
| 林原 毅 | 独立行政法人 水産総合研究センター
遠洋水産研究所 外洋資源部 外洋生態系研究室 主任研究員 |
| 日高 道雄 | 琉球大学 理学部 教授（御欠席） |

古川 恵太	国土交通省 国土技術政策総合研究所 沿岸海洋研究部 海洋環境研究室 室長（御欠席）
安村 茂樹	財団法人 世界自然保護基金ジャパン自然保護室 主任
山野 博哉	独立行政法人 国立環境研究所 地球環境研究センター 衛星観測研究室 主任研究員（御欠席）

○関係省庁

<環境省>

渡邊 綱男	大臣官房審議官
奥山 正樹	自然環境局自然環境計画課 課長補佐
荒牧 まりさ	自然環境局自然環境計画課 サンゴ礁保全専門官
滝澤 玲子	” ” 主査
小林 靖英	九州地方環境事務所 那覇自然環境事務所 国立公園・保全整備課 自然保護官

<内閣府>

佐藤 将由	内閣府 沖縄振興局 参事官室 専門官
-------	--------------------

<国土交通省>

谷 幸治	国土交通省 総合政策局 海洋政策課 係長
山口 隼人	国土交通省 河川局 海岸室 係長（御欠席）
草野 真一	国土交通省 港湾局 国際・環境課 係長

○関係自治体

石走 健吾	鹿児島県 環境部 自然保護課 主査
久田 友弘	沖縄県 文化環境部 自然保護課 課長
玉城 正博	” ” 主査

○事務局

木村 匡	財団法人 自然環境研究センター 主席研究員
宮川 浩	” 主席研究員
鈴木 隆	” 上席研究員
日比野 浩平	” 主任研究員
森本 直子	” 研究員

【議事要旨】

1. 開会

2. サンゴ礁生態系保全行動計画（案）について

（1）資料説明

● 資料説明（荒牧サンゴ礁保全専門官）

- 前回 11 月 16 日の策定会議の後の経緯を説明したい。前回の策定会議の後、頂いた意見等を内部で修正・調整させて頂いた。その後パブリックコメントを実施し、3 月 1 日に沖縄で意見交換会を行った。これらの意見等を反映したものが本策定会議で配布した行動計画（案）である。この後、省内の手続きをさせて頂き、正式な公表・決定は 4 月に入ってからになる予定である。その際は、記者発表も予定している。
- 資料 3 の説明。2 月 16 日～3 月 15 日に関係資料を環境省のホームページに掲載してパブリックコメントを実施した。意見募集の結果、21 の個人または団体から 72 件の意見が寄せられた。それらの中から、今の時点で行動計画に反映しうるものを検討の上で文書に反映した。
- 資料 1 の説明。改定した部分のみを説明。
- 資料 2 の説明。行動計画の概要についても若干修正した。

（2）意見交換

- どういう文言を具体的に修正・加筆されたかをご説明頂いた。順番に見ていきたい。「連続する砂地」はどういうイメージなのか？
→サンゴ群集が生息しているところからつながっている場所というイメージで書いた。
- 6 頁上から 10 行目の「サンゴ礁生態系に配慮した行動すること・・・」は、「行動をする」に訂正。
- 6 頁の脚注は、5 頁の脚注が飛んでしまっているため、書式を直す。
- 5 頁の図は最終的にカラーで出すのか？色分けがぱっとしない。また、18 度線というのが、年間の冬場の最低水温というのをきちんと説明した方がよい。
→カラーで出すかどうかはものによる。電子情報等はカラーになる。18 度線については脚注に説明を加える。
- 9 頁の 3 ポツ目は、着床しやすいブロックという言葉に「港湾の」という但し書きが必要ではないか？
→「みなとづくり」と表現しているので、すでに含まれている。
- 同じ行の「移築」という言葉については、環境省が出した手引きと、国土交通省が出した手引きで定義が異なっているので、説明を加えた方がよい。
→マニュアルを確認させて頂く。
- 10 頁の追加になった部分。「事業者や旅行者などを含めた」のところ。地域外からの人

には我々は通常総称して「訪問者」という言葉を使う。具体的な提案は今のところないが、検討頂きたい。

→記述は環境省に任せる。

- 用語を修正されたのは、具体的にどこか？
→「保護」や「保全」という言葉の使い分けを統一した。9頁の国際的取組が例である。「再生」については、「保全」に含むという議論になったので、整理した。
- 10頁の学校教育と地域コミュニティへの教育は別だと思われる。6頁の「学校、公民館などの地域コミュニティ」の個所は、10頁となるべく表現、単語の使い方は合っていた方がいい。10頁の取組の方向性2行目は「学校を含めた地域コミュニティ」とすればよいかもしれない。
→環境省で検討する。
- 18頁の冒頭の具体的な取組。沖縄は生物多様性地域戦略を新年度から取り組まれる。それを加えるというのはどうか？是非2～3行で構わないので入れた方がいいと思う。
→今年は陸域から沿岸域までの情報整理を考えており、それを踏まえて次の年から本格的にやりたい。
- 同じ18頁の「面源」は一般的でないので、注釈が必要ではないか？
→注釈だと分かりにくいので、文章で書いた方が分かり易いと思う。
→今頂いた意見を基に修正を検討したい。
- 19頁の加筆された「親群体の保護」というのはどういうイメージか？
→イメージしているのは、無性生殖の元になるサンゴへの影響を考慮した趣旨。
- 19頁の有性生殖の補足の説明。環境省の方式と違って、阿嘉島方式では種苗生産の過程が入るので、どうしても使えるサンゴの種類が少なくなる。遺伝子レベルの攪乱防止には厳密には当てはまらないことは理解しておいた方がよい。
→親群体を採って来て水槽の中で産卵させるという有性生殖の手法もあるが、今はそこまで扱わなくてもいいかもしれない。
- 19頁の下から3つのポツで、「漁業…等の地元関係者」というのと、6頁の上から4行目の「農林水産業従業者」とでは異なる表現を使っている。これは意図的に異なるようにしているのか？使い分けをされているのであれば問題ないが。
→6頁の方が網羅的に記述している。確認を取る。
- 13～14頁の「里海」のところを見ると、ほとんど環境省が里海をやるように見える。水産庁は里海を考えていないということか？
→「里海」という言葉を使った事業が水産庁になかったためである。
- 水産庁の事業で普及啓発を担当している全国漁業協同組合連合会で、里海という言葉を使っていこうという議論があり、水産庁でも来年あたりから使い始めるかもしれない。海洋保護区についての水産庁の反応はどうか？
→海洋保護区は関係省庁全体でやるということになっている。

- 資料2の一番下の「毎年の点検」は、本文の「5. 実施状況の点検と見直し」でも扱われている。概要の方にも連絡会議についてももう少し膨らまして書いた方が分かり易いと思われる。
- 14頁の農林水産省の具体的取組でオニヒトデ除去が出てくる。一方、19頁の下から3ポツ目では農林水産省は出て来ないが、これでいいのか？現場からすると、どこかで水産庁や環境省といった省庁が連携しているというのが見えると良い。
→14頁は支援事業で主体が地域住民となっているので、こちらに書いた。水産庁と相談する。
- 72件意見を寄せられたそうだが、どういう業界からの意見が多かったのか？参考までに聞きたい。
→団体では、ダイビング関係など観光業界からが多かった。それ以外ではNGOや地域の保全協会、個人などからだった。若干個人が多かった。高緯度地域からの意見は、4件であった。
- 資料2で、「保全・再生」で一部「再生」が併記されていない。再生は重視しないということか？
→再生を重視していないのではない。行動計画の議論の中で、保全に再生も含まれるという整理をした。これについては3頁の(3)に定義している。この表現を資料2の目標のところにも入れる。
- 議論は出尽くしたようだ。時間が余っているが、これで終了とすることにする。

3. 挨拶

● 挨拶（環境省 渡邊綱男大臣官房審議官）

2年間に渡って策定会議の委員、関係省庁・自治体、その他幅広い皆様に意見・コメントを頂き、感謝している。サンゴ礁保全は、空間的、分野的にもいろいろな意味で対策の幅を広げないと効果が上がってこないため、関係省庁のみならず、自治体、NGO、研究者、民間事業者、地域の人々など幅広い主体に関わって頂くことが重要である。2年前の立ち上げの際はいろいろと悩みながら立ち上げたが、一步踏み出す形になれて、立ち上げてよかった。4月中旬には計画を固めて公表したい。今後は計画を受けて具体的施策を進めていくことが課題である。来年度は生物多様性条約第10回締約国会議（CBD COP-10）が10月に名古屋で開催され、沿岸と海洋の生物多様性が大事な議題になっている。また、気候変動と生物多様性、あるいは保護地域等の大事なテーマもあるので、サンゴ礁は重要になってくる。また、これとは別に東アジアにおける地域戦略もまとめており、COP-10においてサイドイベントを行えないか応募している。今回の行動計画も英語にして世界に発信していきたい。策定会議はこれで終わりとなるが、今後行動計画を基にいろいろな施策をフォローしていくために連絡会議（仮称）の立ち上げを計画している。連絡会議に入れるメンバーには限りがあるが、2008年の国際サンゴ礁年に関わってくれたいろいろなセ

クターの人たちがこの行動計画を受けた取組をしていくときの情報共有の維持・発展の仕組みについても、連絡会議とうまく関連付けて工夫を考えていきたい。策定会議に関わって頂いた方には、次のステップでも引き続きご協力頂きたい。2年間ありがとうございました。

4. 閉会